

## 2000年度 ドイツ語授業報告

飯田 道子

私が今年度担当したのは、1年生の「入門」ドイツ語と「総合」ドイツ語をそれぞれ3クラス、2年生の前期リテラリー・コースと後期の言語文化コース2クラスである。それぞれの授業についての報告と共に、思うところを述べてみたい。

### 1. ドイツ語「入門」「総合」クラス

#### (1) テキストと授業進度について

テキストは統一で「立教生のドイツ語」を使用。1学期中に中間と期末の2度の統一試験を実施。授業はテキストをメインに、私の場合は文法の説明を初めにしてから本文の発音、音読練習と進めていくが多かった。年頭にカリキュラムがしっかり組まれた構成になっており、「自由な」時間をとることが難しいというのが教える側から出ている共通の見解だ。確かに、私も授業の合間をぬってビデオを見せたり、自分の体験談を話す時間をとるようにはしているのだが、学生からは「もっといろんな話を聞きたかった」という声が多く、こちらとしても残念な思いでいっぱいである。初級文法の習得

はむろんおろそかにはできないが、そこからもれてしまいがちなことに心をくばっていくことの大切さを痛感させられる。ベルリンに壁があったことを実感として知らない学生が大半を占めている昨今、我々が自身の体験を語り継いでいく他ないのだから。

とはいえ、テキストとのかねあいを考えると、事はそう簡単ではない。現行のテキストでも文法は必要最低限のものにとどめていて、そのことに不十分さを感じるという意見は教員の側から毎年あがっている。教える容量を減らせば済むという問題ではない。どういふテキストが授業の現場に最も適しているのかは、教員個人個人の指導方法と密接に関わっていることでもあり、簡単に解決のつく課題ではないのだが、立教は独自のテキストを作って授業を行うことができるという「強み」があるのだから、今後どういう方針で授業を行っていくのかについてさらに意見交換を重ね、テキストのあり様や使用方法が検討されるべきだろう。

#### (2) 統一試験について

統一試験の問題をテキストから出題

するのも、毎年のこととなるとおのずとバリエーションに限界がある。加えて、学生たちの情報交換網は年々発達しているから、似たような出題を繰り返すわけにはいかない。そこで今年は思い切って、テキストの内容からは少し離れても応用力をためせる問題を工夫してみた。果たして学生たちはどこまでできるのだろうかとこちらとしては危惧したのだが、そこは百戦錬磨の受験世代のこと、こちらの予想を上回る成績をあげてくれた。そこから考えたのは、文法の復習問題ということなら、授業内で小試験を行うなどしてもうすでになされているのだから、統一試験では、授業内容をふまえた、応用力を問うタイプのものにしてしまった方が、ふだんの授業でしっかりやっている学生が力を発揮できるし、問題作成のバリエーションも広がるのではないか。

試験の結果を見てみると、例年であれば中間試験はよく出来ても、期末試験となると、内容が難しくなるのに加えて、他の科目の試験も重なってドイツ語だけに集中できないこともあって、平均点が著しく下がるものだが、今年度、特に後期は中間と期末の結果にさほど変化が見られなかった。それどころか期末の方が得点のあがったケースも多々見られた。これは学生の授業参加態度とも関係していることではあるが、試験のやり方を変えてみたことも一因しているのではないかと思う。試験問題があまりに「簡単」すぎると、

かえって学生の方がダレてしまうし、かといってあまりに難しくしすぎても意欲をなくさせてしまう。そのへんのバランスを考えながら、今後の統一試験のやり方をさらに模索していかなければならない。

### (3) 学生の授業参加態度について

今年度の1年生は前期、後期を通じて出席率がよかった。これは私だけの感想ではなく、非常勤の先生からも、試験に全員出席したのは初めてだった、という声が聞かれたので、そうなのだろう。むろん中だるみの時期もあり、良かったわけではないクラスもあるのだけれど。

出席の良さは試験の成績にも反映される。1年生にひっぱられたのか、「再履修」で加わっている2年生以上の学生たちの奮闘振りも目立った。授業に出てこない学生には課題を与えているが、皆「素直に」課題と取り組んで、及第したのでほっとしている。加えて、ケアクラスの奮闘振りはめざましいものがあつた。ケアクラスとはいえ、成績に他のクラスとさほど差が無い学生もいるので、彼等が頑張つて他の学生のレベルも引き上げてくれたのかもしれない。因みにこれは私の担当したケアクラスだけでなく、他のケアクラスでも似たような現象が見られた。

積極的に質問をしてくるという、教員にとっては夢のような状況も時々あるし、こちらから水を向ければ、それに応える形で質問やら疑問点やらも出

てくる。時に煮詰まったりする場面もあるが、学生の気分を引き立てるような工夫を重ねていきたいと思う。

## 2. リテラリー・コース（前期）

### (1) テキストと授業進度について

#### a. テキストの構成

テキストは今年度より新たにem (Brükenkurs)を使用。ドイツで作られた、外国人向けのドイツ語テキストで、レベルは「中級への橋渡し」であるが、ゲーテ・インスティテュートでも使われているテキストで、大学の授業のレベルからいうと十分に中級レベルであろう。8課構成で、それぞれの課が「家族」「休暇」「映画」「育児」など、テーマ別になっており、それぞれに「読む」「書く」「聞く」「話す」「語彙を増やす」「文法練習」が設けられている。ドイツのアクチュアルな状況を楽しむながら総合的な力をつけることができるようになってきている。授業の目的が読解力の強化なので、「読む」「語彙を増やす」に重点を置くようにしたが、未習の文法や既習ではあっても復習が必要なこともあり、授業の半分位は文法の確認練習に使った。それでもなお、もっと文法の復習をしてほしいという声があがる。語学の授業における文法復習の必要性について考えさせられる。

#### b. 授業方法

読解ではグループ作業を盛り込むようにした。ひとりでは分からないこと

も、他の人とやれば分かることもあるからだ。あまり辞書に頼らずに読むことを身につけてほしいと思うのだが、なかなかそこまではいかないのが実状だ。

今回新たに試みたのは、テキストでドイツのことを学んだら、今度は同じ課題で日本のことを調べて発表してもらうことだ。自分の国のことを知ることが大切だと考えたからだが、女性の社会進出や理想の家族形態など、身近なことから社会的な事象まで力のこもった発表が多かったのは頼もしかった。

### (2) 今後の課題

これはリテラリー・コースに限ったことではないと思うが、1年次の授業レベルとかけはなれたことをいきなりやるのは当然無理である。1年次で不足していた文法を補ったり、練習を繰り返すことは次へのステップの為には欠かせない。2年生の前期いっぱいくらいはそれに費やしてもいいくらいのことだと思う。辞書の使い方の訓練も必要だ。リテラリー・コースについても、前期は後期への橋渡しのとらえた方が学生のためにはいいのかもしれない。しかしそこで問題になるのは、前期だけで終える学生である。現在でも法学部の学生は前期だけでコースを終えてしまうのが大半である。彼等もたとえ半期とはいえ、成果を求めているので、そればかりでは不足感を抱くだろう。いずれにしても1年次の授業とどう連動させていくかが今後の課題

であろうと思われる。

### 3. 言語文化コース（後期）

#### (1) 文学部・法学部

現代ドイツが抱えている問題を扱った文章をグループで読み、それぞれが内容について発表をした後、ビデオなどの資料を使って講義するという形式で、「ドイツとは何か」「ナショナリズム」「環境問題」「若者」などのテーマを取り上げた。

グループ作業については学生からは賛否が半々といったところ。グループの方がやりやすかったという意見もあれば、自分の担当の箇所しか分からないから不満、という意見もあって、グループ作業のやり方について考えさせられた。筆記試験の出来ばえは良かった。必死になって辞書を引くということだけは身についたのか…。

#### (2) 理学部

会話のクラス。「挨拶と自己紹介」

「旅行の日程」「トラブル・苦情」など、様々なシチュエーションでのモデル表現を練習した後、2～3人のグループに分かれて自分たちで会話を作って発表する。学期末は自由課題（文法だけは指定）のシナリオを作って発表。

理学部にはCOCクラスがないので、会話のクラスをと考えて昨年度から実施している。今年度は参加率が非常に良かった。モデルパターンの練習もシナリオの制作も楽しみながら取り組んでいるようで、こちらもやりがいがあった。文法事項がきちんと身につけているとはいえないが、昔のテキストなどを見ながらあれこれシナリオを作っている。最後の口頭発表でも指定の文法事項をふまえて面白い内容の会話が多かった。

(いいだ みちこ

本学ランゲージセンタードイツ語嘱託講師)